

台湾神社の創建と祭典時の催し物の変容

金子展也

KANEKO Nobuya

はじめに

年に一度の地元の神社のお祭り時期が近づくと、町は俄かに慌ただしくなる。子供の頃は軒下に御神燈と日の丸の小旗を掲げ祝ったものである。猿田彦を先頭に仮装行列や稚児行列、更に神輿の練り廻り等は一層お祭りを盛り上げるものであった。特に他の娯楽の無かった子供の頃に神社のお祭りは唯一の楽しみであった。境内または近くには数多くの露店やオートバイの曲芸等が出ており、境内には必ずと言ってよいほど舞台が設けられていた。芝居あり、歌謡曲あり、幟には「〇〇一座公演」などと書かれていた。また、境内には土俵があり、子供相撲がなされていた。少なくともこの様な風景は、過去日本全国殆ど同じように繰り広げられていたはずである。

日本統治時代の台湾に造営された神社の遺跡とその造営背景を調査する過程で、数多くの古老にお会いした。話の中で、日本時代の神社のお祭りを懐かしみ、神輿を担いで参道を上ったなどと教えられた。領台当初、媽祖廟(1)などの例祭を除いて主だった娯楽がなかった台湾で年に一度の神社のお祭りは、子供のみならず大人にとっても非常に楽しみなものであったに違いない。また、神社での数々の催し物を通じて台湾における「日本化」はスピードを上げて浸透していったものと考えられる。「相撲」、「神輿」、「能楽」そして「舞踊」などである。

本研究ノートでは、まず官幣大社台湾神社創建までの過程を簡単に記述し、明治34年(1901年)10月27日の神社鎮座式と10月28日の大祭式典の両日に行われた台湾神社の神賑行事(3)、余興、町内の出し物、町内の飾り付け(以下「催し物」とする)がどのよう

なものであったか、そして時間の経過と時局の変化に伴い、その内容がどのように変化していったかを考察してゆく。また、日本の統治下に創建した神社の催し物と国内のものとは大きな差があるように思えるし、植民地独特の内容であるかもしれない。その調査方法として、台湾神社が鎮座した明治34年10月の例祭から終戦前の昭和18年(1943年)10月(昭和19年～20年までは資料なし)までの台湾神社の催し物に関する報道記事(台湾日日新報)を調べ上げ、その中から特徴的な年代のものを紹介する。

I 台湾神社の創建

(1) 神社造営

① 官幣大社台湾神社までの道程

明治28年(1895年)11月5日、宮内省告示第15号により北白川宮能久親王(4)の薨去が発表された。その後、「国費を以て臺灣に神社を建設するの建議案」や「別格官幣社を臺灣に建設する建議」が議会に提出された。領台当初の明治30年(1897年)9月1日、第3代乃木総督は台南で薨去した故北白川宮能久親王を祀る神社建設の為に故北白川宮能久親王神殿建設取調委員会を設け、神社造営位置の選定、神社設計および費用予算を編成する一方、その設計を内務省に囑託した。建立地は台北・基隆および台南が候補として挙げられ、最終的に台北が選ばれ、しかも当時の城外(5)である圓山が選定された。しかしながら、第3代乃木総督の転任となり、明治31年(1898年)、第4代兒玉総督の時代に圓山から劍潭山に変更された経緯がある。やはり、劍潭山の位置はその威厳を示し、台北の地を一望できる場所であったからであろう。

そして明治33年(1900年)7月14日、第4代台湾総督府兒玉源太郎による「臺灣神社社格及社号之儀ニ付稟申」が内務大臣侯爵西郷従道宛に出された。「別格官幣社を臺灣に建設する建議案」が明治33年9月18日に衆議院で可決し、同日に内務大臣侯爵西郷従道より内務省告示81号が告示され、台湾神社は官幣大社台湾神社として創建されることが決まった。これにより、東京帝国大学教授伊東忠太の設計により、大國魂命、大己貴命、少彦名命を一座、能久親王を一座として155,900坪の神社敷地面積を有する台湾神社の造営と基隆川の架橋を含め総工費356,358円の大工事に向けて大きな拍車がかかった。能久親王薨去である10月28日を鎮座日と設定され、約2年半に渡る造営工事の末、明治34年(1901年)10月に台湾の総鎮守としての台湾神社がついに竣工した。

II 台湾神社大祭(明治34年10月27日:鎮座式, 10月28日:例祭)

(1) 台湾神社大祭式典に向けて

式典は総督府の業務、祭礼については台北県庁および台北弁務署(警察課)の業務となり、県庁庶務課および秘書課にて専掌することとなった。官民共同の委員を選定することが検討された。そして祭典2ヶ月前の明治34年(1901年)8月27日、城内、^{ほんか}艋舺および^{だいとうてい}大稻埕から33名(内7名欠席)の民間人が参加して台湾神社祭事協議会が開催された。また、これら民間人の出席者の外に台北県各部長および各課長並びに社寺主任者秘書課員1名台北弁務署長および同1-2課長などが加わり、村上知事が座長となった。これら考案委員から設計委員(柳生一義、木田原則孝、木村匡、廣瀬鎮之、澤井市造、金子圭介、山田海三、荒井泰治、金子源治、永山昇)が選定され、その成案を総会で協定することとなった。外、当日出席の各新聞雑誌記者も設計委員に加わった。早速、設計委員では下記諸事項を決議し、これを村上知事に提出した。

- * 村上知事を委員長に推戴すること
- * 今回の祭事に関し協議する諸件は鎮座式と例年の祭礼とを区別して評定すること
- * 祭事に関する総ての費用は募金及び共有金を以て

之を支弁すること

- * 市内の装飾として御紋章を附したる一定の提灯を軒頭に洩れなく掲ぐることを勧誘し、尚、各自の装飾は適宜敬礼を失せざる限り為すべきこと。但し、軒燈提灯の紋章は台湾神社の御紋を用ゆること右に付きては村上知事より其筋に伺出づることなれり
- * 一般市民の名を以て東門より劍潭鉄橋まで道路の片側に樹木を植ゆること
- * 東門より鉄橋まで祭礼当夜浴道に点燈すること
- * 大^{だいあーち}緑門^{ろくもん}数個を要地に設け之れに大國旗を交叉すること
- * 神前に台北市民の名を以て供物を奉進すること
- * 余興の種類を定むること左の如し
角力、^{すもう}競馬(陸軍にて奉納)、演武(武徳会奉納)、^{はなび}花火、^{だし}花車を出すか又は行列等を為すこと、^{ねまひ}踊舞台を設備すること
- * 委員は一定の^{きしやう}徽章を祭典中附着すること
- * 委員の休憩所を要所に設くること
- * 各委員の分担を定むること左の如し
祭事委員: 神前に奉進する供物、^{あーち}緑門、建設、点燈其他の装飾に関すること
余興委員: ^{はなび}烟火、^{すもう}角力、舞台の建設、其他余興に関すること
植樹委員: 劍潭新街道の片側に樹木を植付けること
委員長付属委員: 委員長に附属し各委員との連絡を保つこと

上記決議概略事項は村上知事に一任することになった。なお、例祭に関する費用は4,000円を予算計上することになった。⁽⁶⁾また、上記に並行して、⁽⁶⁾李春生や⁽⁷⁾幸⁽⁷⁾頭⁽⁷⁾栄を中心とする⁽⁸⁾本島人⁽⁸⁾30名で構成される協議会も組織された。

(2) ^{ちやくし}勅使宮地掌典と式典に参加した北白川宮能久親王妃殿下および縁故者

明治34年(1901年)10月27日午前6時頃、冠を⁽⁹⁾戴き、官幣大社台湾神社鎮座式に⁽⁹⁾勅使として⁽⁹⁾朱の直衣⁽⁹⁾に⁽¹⁰⁾紫の袴を身に付けた⁽¹¹⁾宮地掌典は⁽¹¹⁾西警部長及び警部⁽¹²⁾数名に護衛され、⁽¹²⁾掌典補および⁽¹²⁾禰宜⁽¹²⁾数名を従えて馬車

にて台湾総督府に到着し、嗽所^{うがいどころ}にて浄嗽したのち恭しく齋館に入り、御霊代を奉じて退出。三柱の神霊は白丁^{はくちょう}(13)が奉じ、北白川宮能久親王の御霊代は掌典が奉じた。2名の警部が前後を護衛し、儀仗兵^{ぎじょうへい}(14)が吹奏する一曲喇叭に送られ午前7時齋館を出発し、西門街通を左折、書院街北角を右折、文武街1丁目南角を左折、文武街2丁目北角を右折、石防街2丁目南角を左折し新(街)道を通り抜け、台湾神社一の鳥居に着いたのが7時40分であった。

一方、北白川宮能久親王妃殿下は午前7時、白洋装の礼装に、勲一等寶冠章^{くん ほうかんしょう}(15)の綬を帯び、馬車に乗り、村岡老女が陪乗した。そして伊達侯および北白川宮成久殿下代理田中健三郎の同乗する馬車と共に出門。騎兵一中隊および警官が警衛し、同じく新(街)道より神社に向かった。午前7時40分、一の鳥居外に近づくと、社頭第一鼓の合図とともに軍楽隊の吹奏が劍潭山に響き渡った。

鳥居外の左側には、徳川家達公^{いえさと}、伊達宗徳爵侯^{むねえ きよ}、清棲家教伯^{すいえのり}、徳川達孝伯^{さとたか}、久松定謨伯^{さだこと}、乃木希典男爵^{のぎ ますけ}、徳川頼倫^{よりみち}、本田康虎^{やすしげ}、恩地轍等^{おん ちわだち}の各縁故者を始め、大森内務総務長官、其の他在台湾文武高等官等、大禮服正装または正服で並んだ。一方、右側は外国領事、貴衆両院議員^{きじゅう}、従6位勲6等以上の者、各団体総代、内外紳士等燕尾服または支那正服で奉迎した。一方、児玉総督、後藤民政長官、大津・横澤秘書官等は二の鳥居内の左側に、神職は同右側にて奉迎する。当日、参列を許されたのは総勢1,083人となった。これにより、海外における官幣大社として初めての鎮座式が官幣大社台湾神社で執り行われることになった。

(3) 台湾神社鎮座式および大祭典での催し物

10月27日：◆正午12時、圓山公園内の3箇所から打上げられた烟火を合図に各所で始まった余興は50発の烟火、飛び入り随意の素人相撲、武徳会員の撃劍弓術および本島人の催しによる龍舟(現在のドラゴンボート)の競争および奏楽などが執り行われた

10月28日：◆烟火：前日と同じように圓山公園の3箇所にて午前10時から午後10時まで110発打上げられた。また、大稻埕本島人および高橋榮寄附によ

る仕掛け烟火が行われた ◆演劇：午前8時頃より台北館および十字館の俳優演劇あり。芸題は「女将門鎌倉御殿星月夜」^{えがらへいた るんどう}、「莊柄平太問答の場」等 ◆芸者手踊り：◇東検番^{けんぱん}(17)・西俣番：芸妓および付添総勢140名で、芸妓は手古舞の姿に扮し、長襦袢^{ながじゆばん}を幾枚も重ね、菊の花を染め抜いた縮緬衣裳^{ちりめん}を着て、短袴^{たんこ}を穿く。神楽獅子に牡丹の花などで装飾した屋台で木遣音頭^{きやり}を唄いながら練り込み、演舞場へ入り込む。浪花楼^{ななわ}・日本亭と合流して「高砂踊り」を演じる。続いて、艸艸芸妓の演舞となり、鳥帽^{すいかん}に水干^{すいかん}狩衣^{かりぎぬ}(19)で扮装する ◇一力芸妓：芸妓22名、引き子50名および付添40名と共に新起横街を曳き出し、各街を経て神社参拝を終え、演舞に移る

◆薩摩踊り：鉄道隊工場員数10名 ◆辰馬商会：鳥帽子・直衣で恵比寿の姿に扮した60余名は、鯛を抱えたり、吊竿を持ち、恵比寿ビール3輛を曳き出した ◆大稻埕有志：揃いの浴衣に花笠による山車 ◆城内雑貨商会組合員：樽輿・俵輿を肩に、法被姿で担ぎだす ◆元西街1・2丁目：大八車を装飾し、燈籠を吊るし、三味線と太鼓で囃し練り出す ◆元府後街：牡丹花で飾った釣屋台 ◆消防夫：揃いの法被に「木遣り節」で山車をだす ◆一力の芸妓：切り下げ髪^{しちょう}(20)の仕丁姿となり、余興場で「高砂踊り」を演じる ◆陸軍奉納の騎芸：旧練兵場にて2騎および3騎連合による隊列集散運動、打球赤白で10名互いに分かれて相手の球取り、馬場での撃劍、曲乗り、戴囊競馬

《本島人奉納余興》

◆演舞：大稻埕武徳会108名、各武器を捧持して大龍洞旧練兵場塗城内に演武場を設けた舞台に於いて演舞を行う ◆龍舟競争：午後1時より5時まで、鉄橋下より船橋までの間、大小4艘の船と漕手^{そうしゅ}354人で行う ◆奏楽：小蒸気一艘に楽師男女各8名搭乗し、清鼓^{せいこ}、簡板^{かんばん}、北琶^{げっぴん}、夜胡琴^{げこ}、戦鼓^{せんこ}、胡琴^こ、三絃^{さんげん}、洋琴^{ようきん}、簫^{しょう}などを用い、「大天官」、「四郎探母^{たんのぼ}」、「大拜壽^{だいはいじゅ}」、「女帝城^{じょていじょう}」他12曲を合奏して湖畔を上下した ◆女優演劇：山仔脚火車頭付近に舞台を設け女優16名にて芝居を演ず ◆弄獅^{ろうし}(獅子舞)の演舞：大龍洞武榮原址での武徳会員48名による ◆競渡：芝蘭一堡による基隆川両鉄橋の間で

龍舟 4 艘の競渡 ◆大龍洞演劇と演武：大龍洞市民は女優 14 名の演劇および武徳会員操演（弄獅武器を携えて拳法をなす）の催し

III 台湾神社祭典の催し

(1) 明治の部

明治 35 (1902) 年

◆本年は陰祭り（裏祭りともいう）であり、主だった催し物はなし。但し、市内の装飾として、北門街、文武街・府中街・府前街、新起街、舢舨および大稲埕では国旗又は提灯などを掲げて全街を装飾した ◆大稲埕では茶商公会、日新街歩蘭亭および媽祖宮の 3 箇所では芸者演芸を挙行了した

明治 36 (1903) 年

①祭典の特徴：◆本年 2 年毎に行われる本祭り（表祭り）であり、数々の余興・催し物が執り行われた

◆城内の街全てからの余興あり、城外の大稲埕や舢舨での催し物もあり

②余興：台北市による余興：◆撃剣：圓山停車場付近の空き地に約 100 名を招いて開催 ◆相撲：圓山公園水野氏銅像の裏手 ◆柔術：鱧体流の門弟その他数十名の取り組み ◆烟火：公園内と停車場 ◆篝火：明治橋の川岸 ◆芝居：台北座および榮座の俳優により「式三番叟菅京伝授車止の場」、「彌治喜太」、「千本桜道行」、「水滸伝九紋龍立廻り場」の上演各町および団体の余興：◆府直街：揚提灯 2 台を奉納。町内の約 100 名は疑似神官の服装をして囃し、屋台を牛車に乗せて練りだし、神社参拝後各町を曳き歩く ◆撫台街 1 丁目：大行燈 2 台を掲げ、神輿の外部を草花で装飾し、馬 2 頭・黄牛 1 頭を先牽き、束帯した模擬神官が乗馬にてこれに従い、町内の大人約 100 名と児童 30 名も神官の服装で参拝。参拝後各街を練り廻る ◆撫台街 2 丁目および北門街 2 丁目：大掛行燈を 3 箇所吊るし、踊り舞台を設置して手踊り。各戸より明治維新当時の練兵服に陣羽織をはおり、木造大砲を曳きながら笛太鼓等の調練囃して練りだす。勅使街道広場で模擬大砲を放ち、中からは数千の春餅が飛び出す仕掛け ◆府前街 2 丁目及び府中街 3 丁目：3 箇所に揚提灯台を奉

納。また、遥拝所を設け、青竹で柵をし、金屏風で装飾した中に後藤長官が揮毫した「台湾神社大神」の軸を奉祀し、前に御鏡を据え、礼拝した後同町の子供を集めて樽天王を担ぎ廻る ◆西門街：燈籠門の上に軍人の模造銅像。兒玉高德と和唐内（=鄭成功）の活人形が飾る ◆北門外街：注連飾りと奉燈。台北停車場で烟火を打上げ、大稲埕内地人と共同して手踊屋台 ◆北門街 3 丁目および 4 丁目：大餅 3 座を作り、各白木の三宝に載せ、白丁姿の本島人 25 名で担ぎ、各戸より随意的礼装で神社に参詣し、餅は御供物とした後 3 市街に分配する ◆府中街 5 丁目および府後街 1・2・3 丁目：各戸注連を張り、その上に造花を飾る。街路の 3 箇所到大神燈を掲げ、屋台車に酒樽を積み上げてこれに御幣をさし、揃いの衣裳で曳き出し ◆元西門街通り：書院街 1・2 丁目は戸数 140 戸で錦の御旗を立て、羽織袴で練りだす。西門街十字館通りと北門街 3 丁目と共同して戸数 60 戸で神輿を作り、直径 3 尺の鏡餅を載せ神輿を奉じながら参詣。西門街・小南門街および文武街 120 戸で神輿を出し、礼装にて練りだす ◆新起街：山車の上に金幣 3 本および供餅を飾り、その中から数千の投げ餅を出す仕掛け。長袴纏で装飾した 200 名と供養組 50 名と共に山車を従えて参詣 ◆舢舨旧街・大溪口街・歛慈市街：各戸主が兵士の服装をし、芸妓は全て後方任務の看護婦に擬し、大砲を引出してその大砲から舞台となり、新作「神の績」を演じる ◆將軍廟街：本島人芝居を興行。祖師廟街外 3 街および大厝口外街等は各龍山寺祖師廟等にて芝居を興行 ◆大稲埕建昌街：底抜屋台を出し、揃いの服装で練りだす ◆台北および高砂両俊番：手古舞姿で屋台山車を曳き出し、神社参詣後余興場で「高砂踊り」を演じる ◆鉄道部と汽車会社 ◇余興と装飾：メ飾り、大掛け行燈、囃し舞台、機関形模造の屋台を代わりに曳き出し、綱曳きは萌黄の陣羽織に白地紋散しの袴揃い ◇提灯行列 ◇服装：鉄道部は撃剣用胴および垂を着け、短袴を穿き後鉢巻き、汽車会社はよだれ掛けを着け、前に社名、後ろに社紋を記した ◆洋服商団体：赤と白と鳥打帽を冠り、赤の洋服に白のズボン、胸には桜の釦を付けて舟形に模した屋台を

曳いて参詣 ◆余興芝居：榮座の演劇

《本島人の祭礼》

◆台北3市街の一般各戸にての香案(25)を供え、焚香(26)供物を捧げる ◆廟での芝居 ◆瑞艇競走：明治橋付近で4艘の舟を2手に分けて競走 ◆余興場での芝居と演舞

明治37(1904)年

◆本年は陰祭りであり、また日露戦争開戦の年でもあったため、市民側の余興などの催しは計画されず、唯一台北回漕組合が主催する圓山公園内の素人相撲であった ◆町内によっては国旗・献灯を掲げるところもあり

明治38(1905)年

①祭典の特徴：◆本年は5年目の祭典で、第3回目の本祭りとなる。能楽が催され、初めて神輿の渡御がなされた ◆台北庁全管内の各戸とも国旗提灯を掲揚し、また台北市内各本島人は悉く戸前に香案を出して、敬虔(27)の意を表すよう指示があった ◆夜は200発の烟火が打ち上げられ、市内の電柱には電燈がつき、文武街の十字路には大緑門が作られ電燈で装飾された ◆参拝者数は約43,900人(内地人31,400人、本島人12,500人)となり、集団参拝として総督府国語学校、総督府第一・第二・第三付属学校など18校の職員生徒4,986名となった ◆森尾台東庁長が大魯閣社蕃人土目8名外蕃人11名を引率して参拝した

②余興(本祭り)：◆弓術奉射式：3人体配礼射および一寸杉板(28)の射貫 ◆能楽：一の鳥居前左手に舞台を設け、喜多六平太の「岩船」、紀喜眞の「羽衣」および茂山忠三郎の「蚊角力」、畑伝三郎の「井(29)礎」等の狂言 ◆闘龍舟：士林有志による明治橋下の基隆川での短艇競争で、2艘の龍舟に40名ずつ乗り込んで、目的地にある紅旗を奪い合う ◆演劇および人形芝居：本島人による人形芝居は建成街市場4台、新興街1台、法主公街3台以上、演劇は南街、中街、朝陽街、永和街、長樂街、鐘厝街、媽祖宮街、同後街、同口街、同口後街にて開催 ◆相撲、擊劍会：10月28日午後一時より、圓山下広場にて開催。武徳会、練習所および監獄の教官よりの剣士100名余りと柔術家50名の参加あり

③各団体の催し物：◆府前会：府前街・府中街2・3

丁目の合同により150名ばかりが模擬古物の軍装をし、5名の大将は騎馬(30)が殿をつとめ、行政学校前から勅使街道に向かう ◆北門会：模擬大砲を引き出し200数十名カーキ色の軍服のような洋服で軍楽隊を先頭として長官官邸前より勅使街道に向かう ◆直友会：先頭に献納の鏡餅を引き出し菊模様の法被(31)を着た100名ばかりの会員花笠を被り、踊屋台を引き出し、勅使街道に向かう ◆大同会：大同会で新調した神輿は10月27日、台湾神社に担ぎ出され町内を一周し、その後は一の鳥居前の能舞台に安置し、翌日正午に奉迎し帰った。この外、囃子屋台を300余名の浴衣揃いで引き出した。帰途は真榊(32)を真っ先に立てて次に神輿、そして花屋台を引いて市内を練り廻る ◆府後街：献納の鏡餅および餅蒔き用の小餅を先に立てて100数十名染浴衣を着て花屋台を引き出し、屋台には吾妻の芸妓総出で囃子物を行い、圓山山仔脚広場で餅蒔きを行う ◆城内および北門外街：本島人400名ばかりで午前8時より北門外に勢揃いして旗行列 ◆西門外街：200数十名が同じ法被で花笠をかぶり、囃子屋台を出し、20名ばかりの少女が同じ服装で手踊りを行い、西門より城内に入り、勅使街道に向かう ◆料理屋組合：屋台を出し、台北俚番の芸妓総出で、婦人は蟹(33)、男子は漁夫の服装で市中を練り廻る ◆新起公会：鳴海(34)の揃いの浴衣で踊り、屋台の3人の小児は三つ人形の服装をし、一方の芸妓総出で歌舞を行う。壇(35)尻を引き出して囃子で文武街から勅使街道に向かう

◆艋舺団：100名ばかり同様の服装で屋台を引き出し、遊郭の芸妓総出で紅葉狩仕丁の扮装で歌舞を為して市内を練り廻る

明治39(1906)年

◆本年は陰祭りであるため市中に於いては特に催しものは検討されなかった ◆新起街での生花陳列があった程度であるが、夜は軒提灯により全街イルミネーションで飾られた ◆蕃人100名(嘉義 ツオ族15名、阿緞 ツアリセン族10名、南投 タイヤル族15名、恒春 パイワン族33名、台東 アミ族37名)が参拝した

明治40(1907)年

①祭典の特徴：◆鎮座7年目の本祭りで大いに賑う
◆御旅所⁽³¹⁾を新公園内の遙拝所に設けて祭典が行われた。鎮座記念祭終了後、御霊代は白木作りの唐櫃⁽³²⁾に奉安され、神官2名により台湾神社を出発し、勅使街道を東門より武徳会体育倶楽部構内に設けられた御旅所に渡御あり ◆余興が御旅所のある新公園で行われるようになる。それまでは、台北市内の余興は28日に圓山に繰り出し、明治橋手前にある左側の田圃に余興舞台を作って行われていた ◆初めて大阪相撲の興行が行われる ◆能狂言が上演される ◆本年より、本島人による催し物が数多く出され、台湾版山車である芸妓閣や蜈蚣閣⁽³⁴⁾が練り出される

②余興(御旅所)

宵宮

◆能狂言：御旅所左方に設営された舞台上で上演。演目は狂言(「高砂」、「末廣」、「羽衣」、「仏師」、「田村」、「骨皮」、「小袖會我」、「融」、「蟹山伏」、「玉の段」、「敦盛」、「笠の段」、「経政」、「船弁慶」)

◆烟火：100発 ◆撃剣および柔道 ◆蕃人の踊り：埔里社の蕃人20名余りによる飛入り余興あり。「嫁入りの祝儀」と「首取祝儀」などを演じる

◆少年力士土俵入：大阪相撲一行中の少年力士 ◆燎火◆イルミネーション ◆各種の夜店

《演舞》：◆府後会：女奴(高砂検番芸妓10名、地方12名) ◆台北検番：手古舞(芸妓12名) ◆大同会：「稻妻双紙鞆当」(子供3名) ◆「俄獅子」

「忠臣蔵」5段目6段目 ◆鯨鯉団：「廓錦」(鯨鯉芸妓10名、地方17名) ◆西門外街：「秋の鹿」その他数番(娘連14名、若衆6名)

◆北門街：獅子(躍り方8名、囃子8名) ◆新起公会：「橋弁慶」(子供2名、地方2名)、「紅葉名所」(一力芸妓4名、地方3名) ◆府前会：「和藤内」その他数番(幫間連中)⁽³³⁾

《各団体の催し》：◆府後会：踊屋台(女奴)150名 ◆台北検番：踊屋台(手古舞)70名 ◆大同会：神輿60名、踊屋台200名 ◆鯨鯉団：踊屋台120名 ◆西門外街：踊屋台200名 ◆大稻埕公会：壇尻150名 ◆北門会：獅子舞、ヒコツト

コ踊地囃し屋台150名 ◆新起公会：壇尻、踊屋台400名 ◆府前街：楽隊、仮装行列、屋台290名 ◆直友会：日本武尊屋台、仮装行列100名 ◆西門外街：獅子遊戯 本島人50名 ◆城内第三保：人形芝居 ◆北門外街：人形芝居 ◆北門会：櫓の上で神楽踊

本祭り

◆御旅所御霊代御還御：10月28日、御霊代は神輿に奉移。大同会の若者100余名によって担がれた神輿は榊、太鼓、猿田彦、武具等に先導され午後4時20分頃に神社に還御した ◆烟火：100発 ◆能狂言：仕舞——「枕慈童」、「実盛」、「大江山」、「桜川」、「通小町」、「松風」、「八島」、「熊坂」。狂言——「清水」、「不聞」、「坐頭」、「芥川」 ◆撃剣、柔術 ◆奉納相撲：大木戸および放駒を東西の大將として150名を率いる大阪大相撲が初めて台湾での興行を行った。興行に先立ち、御旅所にての奉納相撲あり

《各団体の催し》：◆府後会：踊屋台 ◆台北検番：踊屋台 ◆大同会：屋台 ◆鯨鯉団：踊屋台 ◆西門外街：屋台 ◆大稻埕公会：壇尻 ◆北門会：獅子舞、ヒコツトコ踊 ◆新起公会：壇尻、踊屋 ◆府前街：楽隊、仮装行列、屋台 ◆直友会：屋台 ◆茶商公会：音楽隊、芸妓蜈蚣閣 ◆阿片組合、香慶神戸物質卸商、大稻埕呉服商、大稻埕菓種商、大稻埕雜貨商：芸妓閣 ◆大稻埕米商、大稻埕煙草元売商、大稻埕陶器商：音楽隊 ◆建昌、港邊、千秋街：車鼓 ◆中北街：芸妓閣 ◆北門外街外3街：彩牌鼓吹 ◆建成公街：太平歌 ◆稻新街、九間仔街、太平横街：大鼓吹 ◆獅館巷街：音楽隊 ◆頂牛磨車街：翁姨 ◆西門外街：獅子遊戯 ◆北門外街：太鼓囃 ◆城内大三保、北門外街：人形芝居 ◆鯨鯉：擔台、舞踏 ◆大稻埕区役場、大稻埕煙草元売商：各彩船一隻 ◆士林：ボートレース ◆媽祖宮前街：芸妓音楽 ◆龍山寺街：芸妓芝居 ◆祖師廟前街、旅館口街、八甲庄、八甲街、北皮寮街、將軍廟街：芝居 ◆南新街有志者：花車 ◆大龍洞：獅子陣 ◆士林管内：競渡龍舟 ◆北門会：神楽踊り

明治41(1908)年

◆明治41年4月20日、基隆・高雄(旧打狗)間を結ぶ408.5Kmの縦貫鉄道が全通し、その開通記念式典が同年10月24日、現在の台中公園で執り行われた。この式典に閩院宮載仁殿下が参列した。殿下は台湾に滞在中、台湾神社例祭式に参拝した ◆本年は陰祭りであるため、目立った催し物はなかった

明治42(1909)年

- ①祭典の特徴：◆鎮座9年目の本祭りで大いに賑う ◆当初、佐久間総督が奉幣使として参向する予定であったが、病気で大島民政長官が代行した ◆神輿は従来大同会のものであり、大同会の倉庫から御旅所に移していたが、本年より中央に寄附され、台北市の神輿となる ◆本島人の催しが更に多彩になり、数多くの詩意閣、蜈蚣閣などが出された

②余興(御旅所)：

宵宮

◆烟火100発 ◆能楽奉納：番組「忠彦」、「三本柱」、「清水」、「熊坂」、「骨皮」、「千鳥」、「花折」、「土蜘蛛」、外仕舞 ◆演舞(台湾祭)：手古舞の揃い衣裳で舞妓130余名による春夏秋冬唱歌を手踊りで、間に木遣り節を挟む ◆燎火：明治橋左右、一の鳥居前後および御旅所 ◆弓術 ◆芸妓唱：御旅所構内の舞台上で大稻埕本島人50名、艋舺本島人48名による奉楽 ◆花柳界屋台：艋舺女紅場から新起街にでて御旅所まで250名による手古舞

本祭り

◆烟火100発 ◆能楽奉納：「鉢木」、「業平餅」、「重喜」、「仁王」、「梟山伏」、「船弁慶」外に仕舞 ◆奉納武術、馬術、演舞：前日に同じ

- ③各団体催し：◆花柳界屋台：艋舺女紅場から市街を練り歩く

- ④大稻埕本島人の催し：◆午後1時30分、太鼓吹を鳴らし、太鼓、鏡等叩きつけ、新製72隊のいづれも金箔を塗り、異様な形の槍・青龍刀・鉞などを担ぎ、一隊を先に続いて弄龍3陣、弄獅一陣、72隊一陣、詩意閣11台、蜈蚣閣2台が人波をわけいて御旅所に練り込んだ。弄龍3陣は大円形を作り、打ち込む太鼓の音につれて竹竿の先に付けた玉

を取ろうと、玉の動くままに上下左右に波打つさまは圧巻であった ◆弄獅に一陣は72隊と合併して他の円形を作り、獅子の駆け廻る後より、錆に錆び腐った刀・薙刀・槍等を担いだ72隊のもの20~30名がぐるぐるとついて廻った ◆新製72隊楽器全体および太鼓吹全陣：大龍峒街外 ◆蜈蚣閣：2台42名 煙草元売捌人 陳天順外 ◆詩意閣：11台94名 阿片組合他 ◆弄龍：3陣 85名 日新街組合他 ◆弄獅：1陣 25名 大橋頭街組合 ◆72隊：1隊 100名 大龍洞街組合 ◆新製72隊楽器全体および太鼓吹全陣：大龍埕街外

- ⑤艋舺本島人の催し：◆大稻埕と入れ代りに緞子の大旗の数旒を真っ先に押し立て、南官・北官の什音面白く囃したてて、蜈蚣閣2台、詩意閣2台、合粧詩意閣4台が相次いで御旅所に練り入った

◆蜈蚣閣：2台 40名 酒造組合外 ◆詩意閣：2台 4名 料理屋組合外 ◆合粧詩意閣：3台 15名 先生連中合同外 ◆南官および北官：什音 紳縉有志者 ◆龍鬪船：明治橋の上流で行われ、一艘に20名近く乗り込み、競漕して旗取りをするもの ◆芸妓閣：舟上芸妓閣 一隻 ◆その他、掌中班、演戯、北官曲、女芸閣、競渡、芸閣、芝居、太鼓吹、芸閣、唱芸、弄龍、南官曲、人形芝居、太平歌、娼芸、芸妓演芸等が36街(一部は街同士の合同を含む)で執り行われた

明治43(1910)年

◆本年は陰祭りのため、特に大がかりな余興はなし。それでも参詣者は約12,000名と推定され、その内本島人は2,400名以上に達した ◆各街では軒幕と神燈で装飾し、各所には生花や盆石などが陳列された

(2) 大正の部

大正元(1912)年

◆9月23日、台湾全土を襲った暴風雨の未曾有の被害および明治天皇の御諒闇のために主だった催し物は少なかった ◆本年は陰祭りであったが参拝者は多く約17,000名であった ◆各街献燈・国旗が飾り立てられた程度であった

大正2(1913)年

①祭典の特徴：◆参拝者は約25,000名、内本島人16,000名となり、また、学校生徒集団参拝は約14,000名となる ◆御旅所が間口3間、奥行き2間の神明造りで、本島産の檜節なしを使用して新公園内運動場の北寄りに新築された。27日、午後1時3分^{はなび}の煙火を合図に^{しゅぼつ}挙行。修祓、^{けんせん}降神式、献饞^{けんぜん}を行い、祝詞が奏上された。翌28日、午後4時から昇神式が執り行われた ◆新公園内の音楽堂で奏楽が行われた

②余興

◆能狂言

10月27日：能 — 「加茂」, 「経政」, 「桜川」 仕舞 — 「鶴亀」, 「田村」, 「松風」, 「春日龍神」, 「殺生石」, 「山姥」, 「七騎落」, 「土蜘蛛」, 狂言 — 「鼻取角力」, 「禰宜山伏」, 「黒塗」

10月28日：能 — 「八島」, 「羽衣」 仕舞 — 「老松」, 「敦盛」, 「笠の段」, 「鐘馗」, 「玉の段」, 「天鼓」, 「船弁慶」, 「猩 猩」, 「鉢木」, 「紅葉狩」 仕舞 — 「鶴亀」外8番 狂言 — 「二人袴」, 「井 礪」, 「髯 櫓」

◆奉納相撲：奉納大阪相撲あり。また、子供相撲や飛入り相撲あり ◆奉納仕掛け煙火：三板橋の煙火師橋本秀俊によるもので27日夜御旅所にて点火。「忌垣^{いがき}の藤^{ふじ}」, 「花に蝶」, 「遊龍」, 「亂射玉」等 ◆八雲琴：御旅所にて奉納弹奏 ◆音楽堂の奏楽：新公園音楽堂にて両日開催。本島人による清樂が演奏され、胡弓の音や阿嬌^{あきょう}の声が響き渡った ◆池坊流生花奉納：駐車場囃し屋台や鉄道ホテルなどで生花陳列を行う ◆その他：27日午後1時半、民政長官官邸前では、先ず前弾きが終わると木遣りで踊り子が入り込み、台北検番の芸妓が揃い、声を張り上げ一くさり終わると別の支隊が金棒・提灯等の格好で木遣りで練り込む。台北検番に続いて舩舩連が紫に秋草の裾模様で新作の剣潭踊りを披露。その後は新起公会の屋台が乗り込んだ

③各団体催しおよび町内街の装飾

◆府前会：◇花屋台を揃いの浴衣を着用、200名で曳き出す。若手連中による手踊り「桃太郎鬼が島征伐」, 「仁輪加三人奴」, 「同新町橋」を御旅所にて披

露。特に桃太郎鬼が島征伐のおとぎ話は子供大喝采を博する ◇揃いの提灯に白と黒との段だら幔幕^{まんまく}(41)を張りを通す ◇行燈式の大緑門、大國旗交又で装飾 ◆府後会：◇獅子を乗せた山車を牛に曳かせ、若い衆30名ばかりで木遣りで練り出し、これに屋台を曳き出す。随所に、手踊り、二輪加、獅子舞を演ずる。10月28日は御旅所舞台にて木遣り、供奴^{ともやっこ}(42)、競い獅子を披露。衣裳は手古舞姿で、紺の股引に紺の足袋、赤い祭の字を背に、鉢巻きは豆絞^{まめしぼ}(43)りの手拭い、牡丹の花笠を背中に、手には牡丹模様^{きしゅう}の扇子 ◇町内の徽章を染めた幔幕を掛け連ね、提灯台には紅葉の枝を添えて注連縄を張り、国旗・日の丸提灯で装飾

◆新起街：◇破風作りの高欄付き紅葉と菊の造花で飾られた花屋台に一方の芸妓を乗せ、300人ばかりで曳き出し、屋台の舞台上で「花車」(舞子4名)、^{あさづまぶね}「朝妻船」(舞子3名)を演ずる。10月28日は御旅所舞台にて「秋の錦」(舞子7名)および「恵の露」(舞子2名) ◇電燈飾の大華表を作り、献燈大國旗を数か所に設ける ◆舩舩団：◇囃し屋台に舞子・囃子方32名が乗り込み、100名の若衆で曳き出して、新作剣潭踊りを演じる。27日は長官官邸および台北庁を廻り、28日は鐘鼓・銅鑼・チャルメラの音を真っ先に5彩の旌旗を靡かせ、芸姐の詩意閣・蜈蚣閣20台を曳き、長義軒・合義軒・協議軒等の旗を立てた音楽隊や清樂隊が奏樂しつつ街路を練り廻った。また、大天狗・小天狗を先導に囃し屋台で御旅所に入り、舞台に出演 ◇桜の枝に金銀の短冊紅提灯と日の丸のプラリ提灯で遊廊の2階3階を装飾 ◆西門外会：◇二見ヶ浦の屋台を200名で引き出し、囃子方20名にて囃したてて各町を廻る。28日は手踊りで御旅所に出演 ◇町内には大國旗、大献燈を作り、各戸注連縄を張り、紅葉の枝を添えたる日の丸提燈を掲げる ◆八甲会：200名ばかりの浴衣揃いで鷲と大蛇をあしらった山車および囃し屋台を曳き出し、各町を廻る。28日は御旅所にて「高尾の紅葉」や手踊りを演ずる。町内には大提灯・大國旗を作り、軒燈を掲げる ◆北門会：◇28日に獅子の屋台を曳き出し、馬鹿囃し、獅子舞、二輪加親孝行等を御旅所の舞台上で演ず ◇丸型

の火の丸提灯を揃え、5式の幔幕で装飾。町内には大神楽舞台を設置 ◆大同会：250名で山車および囃し屋台を曳き出し、手踊りを演じる。町内は花笠作りの神燈等で装飾 ◆南門外会：町内に大提灯、大国旗等を装飾し、27日に数10発の煙火を打上げる。青竹を立ててこれに注連を張り、提灯・国旗を装飾 ◆大稲埕公会：町内に大国旗を数か所に建て、大華表を作る

大正4(1915)年

◆11月10日の大正天皇の御大典(44)と神社大祭との期日が余りにも接近しており、また本年は陰祭りでもあるため、特に大がかりな余興は執り行われず

大正5(1916)年

①祭典の特徴および各市街の催し物：◆参拝者は約3万人と見込まれた ◆雷雀一行が初めて来台。少なくとも大正9年までは毎年来台する ◆集団参拝：国語学校、高等女学校、医学校、農事試験場、工業講習所および台北市内6小学校・3公学校生徒児童を初め台北付近公学校児童約1万数千人が職員に引率された参拝

②市内の装飾：◆各市街はそれぞれの装飾を行ったが、軒並みは悉く国旗と御神燈を掲揚。辻々には大国旗の交叉または提灯台を建て、奉納の生花を陳列 ◆大同会：陸軍部前に神輿の安置所を設置 ◆府前会：踊り舞台を設けて、娘たちの手踊り ◆生花・盛り花：台湾花道会の生花、橘会の盛花、南青山流の生花、梅友会桐村社中の細川流 ◆盆石、手島社中の生花、四明会梶井宮御流の生花が陳列された

③新公園の余興

例年通り、新公園大広庭の中央北部に遥拝所を設け、その両側に日の丸に台北の徽章(45)を表した大提灯100個を吊るす。正面入り口には大鳥居を建立し、更に広庭南端には中央余興場を設置。この外、遥拝所東側に能舞台、右側に相撲土俵、更にライオン前の広場には武術道場と台湾芝居その他の舞台を設けた

宵祭り

◆台北検番：◇菊花壇の飾付をした屋台に舞子連中が乗り込んで、道中囃し ◇鼠染めの袴(46)に股引腹掛けの鷲(47)の者12名が金棒と長提灯を持ち、先

に立ち、次いで小姓6名、続いて文金高島田(48)の御殿女中6名が進む。続いて地方(49)が黒紋付で10名、三味線10名、そして囃しは鼓3名、太鼓3名で公園に練り込み、午後6時過ぎから舞台上で「台湾祭り」と新作「千々の秋」を披露 ◆艋舺団：午後4時半、一行は艋舺を出発、公園に練り込み、早速「勢ひ獅子劇場花四会」を披露。手古舞(46)、新造、金棒引き、地方(唄)、三味線、鳴物等で大喝采を博した。その後、艋舺に引き上げ梅月本店前の舞台上で改めて上演 ◆能楽

《その他の余興》

◆中央大余興場の雷雀一行の軽口、手品、皿回し、手踊り、小娘連踊りを初め旧喜劇(「雪の緑」、「浦里」、「おかや」、「深草小将」)や新喜劇(「ふみちがい」、「御免やす」、「女黒髪」)を上演 ◆台湾舞台での台湾芸妓連の台湾樂の奏樂 ◆大同会の神輿：陸軍部前の安置所に安置されていた神輿は午後3時から80余名の若衆に担ぎ出され、猿田彦を先頭として真榊、鉾や弓などの飾り道具の行列で賑った ◆子供相撲午前中は小力士による子供相撲、午後からは宮相撲が開催

本祭り

◆雷雀一行の喜劇(中央舞台) ◆銃剣術の試合：後藤男爵銅像裏の柔術道場で開催、子供相撲、能楽、艋舺団の手踊り：「勢ひ獅子」、台北検番による「台湾祭り」と「千々の秋」の上演 ◆大同会の神輿

大正6(1917)年

①祭典の特徴：◆北白川宮成久殿下同房子妃殿下が10月22日から11月2日まで渡台。同両殿下の渡台にあたり、陰祭りにも関わらず盛大な祭典が催された

②新公園での余興：◆雷雀一座：「三番叟」、「軽口」、「滑稽忠臣蔵」、「喜劇君が代」、「江州音頭引抜き大阪地車踊」、「ヘラヘラ踊」、「吹寄」、「総踊深川」、「滑稽道明寺引抜き(47)鱒(48)掬ひ」等 ◆能楽 ◆娘連手踊り：府前会の催しで10名による記念獅子 ◆台北検番：「捧ぐる錦」および「手向の幣」の披露 ◆艋舺・大稲埕本島人の合同演劇 ◆艋舺組合：「勢獅子廓花四会」の披露 ◆大同会の神輿：陸軍

部前に安置所を作り、両日神輿を担ぎ廻る。28日午後3時頃、神輿を先頭にし、次いで音楽の各隊を揃え、大稲埕および艋舺の山車と新公園に練り込む

◆大稲埕：20台の芸閣と10台の詩意閣を出し、28日午後3時頃に新公園遥拝所に練り込む ◆艋舺：蜈蚣閣2台と詩意閣8台を曳き出して新公園に練りだす。同時に本島音楽団の行列あり

- ③各団体の余興および装飾：◆北門会：町内3箇所到大国旗と大提灯を建て、撫台街に余興舞台を設け、茶楽一派による喜劇を両日開演。内容は喜劇「銅像」二場、喜劇「大正玄治店」二場、喜劇「公園のベンチ」、喜劇「松竹梅」二場、喜劇「宿屋の女」、喜劇「五萬円」二場。また、日の丸館において長崎風揚会を催す ◆西門外街：町内4箇所到大国旗を交叉し、2箇所に大提灯を建て、電燈飾を施し大注連縄に電燈飾を施したものを1箇所作成。また、空地に土俵を築いて両日子供相撲を興行 ◆艋舺：両日、祖師廟および龍山寺に於いて演劇を開演
- ④奉納生花会：◆府全街、府中街、北門街に於いてはそれぞれ美屋比会、南青山流、櫻遠州会による生花陳列

大正8(1919)年

◆第7代総督明石元二郎が重病であるため、この年の祭典における余興を取り止めることも協議されたが、騒がしきだけは押さえて、余興の準備がなされた。明石元総督が逝去したのは鎮座記念祭が執り行われた10月27日の前日であり、全体的に人出は少なく、例年の三分の一程度であった ◆この年に初めて活動写真が上映された

大正9(1920)年

◆久邇宮邦彦殿下⁽⁴⁸⁾および同妃殿下10月20日から渡台し、大祭式での参拝を行う ◆一般参拝者数は19,125名、また、軍隊および学校生徒等の団体参拝(7,557名)あり ◆前年は祭典の賑やかさが自制されたが、本年は従来通りの内容となる

大正10(1921)年

◆大正天皇の病氣悪化もあり、祭典は全体的に静かだった。また、大正天皇の平癒祈願も含めて、一部の市街では大幟が立てられた

大正12(1923)年

◆大正12年9月1日、関東を襲った大震災により、各町での催し物も余興は費用をかけず控えめであった ◆生花挿花と各街入口に大国旗を交叉し、各戸に国旗を掲げて幕を張り、軒燈を下げて祝意を表す程度であった ◆生花陳列(櫻花遠州流生花会が栄町交換局前に陳列台を設けて陳列)あり、また、台北検番による手古舞衣裳で街を練り廻る

大正14(1925)年

- ①祭典の特徴：◆鎮座25年を祝って町内からの寄付も例年の4倍にあたる2,500~2,600円が集まり、盛大な催し物が練り広げられた。各戸は国旗・提燈に飾られ、城内外には「奉納台湾神社」の大幟が立てられ、城内の主だった交差点には日の丸の献燈門が作られた ◆遥拝所の御旅所以外に京街・榮町・新起町および若竹町の御旅所もこの年より出来ている ◆大正11年4月、町名改正により、台北市のこれまでの街が町となる
- ②新公園の遥拝所と余興：◆博物館東側に竣工された遥拝所前には高さ6.3メートル、幅5.4メートルの大鳥居が聳え立ち、27日午後1時から遥拝式が執り行われた。終了と共に、奉納相撲(大人および子供相撲)の挙行 ◆映画(台湾教育会による台湾神社に関するもの他10巻の上映) ◆音楽堂での奏楽 ◆仕掛け烟火
- ③余興：◆本町京和会：舞台を設けて、手古舞、安来^{やすぎ}節、浪花節の素人演芸 ◆榮町・本町・新起町：子供神輿 ◆表町：神輿の安置 ◆京和会：千燭^{しよくこう}光大燈籠を町内十字路10箇所に点火、大獅子頭1対および子供神輿を安置 ◆下塚公会：相撲 ◆新起公会：樽神輿大小1台(市内練り廻り) ◆大同会：大神輿、子供神輿各1台(市内練り廻り、神社参拝) ◆西区：祖師廟および龍山寺にて芸姐唱および芝居を開演 ◆府前会：素人余興、大神輿安置、子供神輿2台(市内練り廻り) ◆若竹町：神輿、屋台曳きと囃し入り手踊り(市内練り廻り) ◆台北検番：手古舞(手古舞姿の芸妓50名、地方、紋服姿の施主^{かかえぬし}一同総数約200名が練りだし、木遣り音頭で屋台を曳き、町を練り廻る。検番を出て艋舺遊廓に行き、女紅場前で踊り、廓内を一巡

し、有明町・入船町から濱町・永楽町から栄町から京町に入り、大和町竹の家前で昼食を取り公園に入る順路で進んだ）◆萬華（旧鯉舟）廓：提燈の上桜の造花を飾り付け。また、女紅場を開放して諸芸大会を開演 ◆写真展覧会：若葉写真会による芸術写真展覧会を開催。同時に会場の一部で橘流菊春園社中の奉納生花陳列 ◆生花奉納：大日本総華督青柳佐喜子社中、台北桜花遠州流活花会社中、橘友会および台湾華道会

大正 15 (1926) 年

- ①祭典の特徴：◆10月27日より11月1日まで北白川宮大妃殿下の渡台があり、10月28日の鎮座祭に参拝 ◆大妃殿下の奉迎のための装飾も加わり、城内は勿論、大稲埕や萬華地区もお祭りムードで一色となる
- ②余興（新公園）：◆台北検番：「吉野夫人」と手古舞踊り「台湾祭り」を披露。総勢80名 ◆萬華廓芸妓：「勢獅子」で総勢15～16名 ◆北区・西区：詩意芸閣の行列 ◆八甲町：手踊り ◆新富町・元園町・榮町・表町・西門町・新起町・本町・八甲町等：各町の神輿・樽神輿 ◆台湾日日新報社：奉迎仕掛け烟火
- ③各町の催し：◆府後会：各戸に国旗・軒提燈を掲げる。表町1丁目・2丁目および北門町の3箇所到大国旗を交叉し、神輿1台、子供樽神輿1台を練りだす ◆大同会：町内各戸に国旗を交叉し、軒提燈を掲げる。屋根には造花の紅葉枝で装飾。神輿1台、子供樽神輿1台を練りだす ◆京和会：千燭光大燈籠を町内十字路10箇所に点火。主な箇所には日の丸大長旗を掲げる。大獅子頭1対および子供神輿を安置 ◆本町会：各戸に国旗・軒提燈を掲げる。台湾貯蓄銀行横の空地舞台を設営し、手踊り、奇術その他諸芸を開催。神輿および樽神輿各1台で市内主な箇所を練り廻る ◆南門外聯合事務所：見玉町、古亭町、新栄町、川端町方面は街路に大国旗を交叉し、大提燈を点燈する。各戸国旗を掲揚し軒提燈を吊るす ◆西門会：各戸に国旗・軒提燈を掲げる。大幟5箇所および大国旗を交叉する外、子供樽神輿で町内および城内を練り廻る ◆新起公会：各戸に国旗・軒提燈を掲げる。樽神輿の後方には屋台1台

を曳き出し馬鹿囃子（聖天囃子、鎌倉囃子、屋台囃子、ニンマ囃子）等を演じ、町内を巡廻後新公園に至る。また、翌日は体操カッポレ⁽⁴⁹⁾徒手「カッポレ」に合わせて^{あらい}並鈴体操の型を行う。樽神輿、神輿1台、枕太鼓1組を出し、総勢約300名 ◆西門委員会：祖師廟龍山寺に舞台を作り本島芝居を披露。5箇所到大国旗を交叉して掲揚 ◆北町委員聯合事務所：各戸国旗・軒提燈を掲揚。町内3箇所に舞台が設置され、本島人芸妓を招いて音楽を奏でさせた。また、清楽7音楽14の行列を作り、町内各所を練り廻る

(3) 昭和の部

昭和 2 (1927) 年

◆大正天皇の御諒^{ごりょうあん}闇のために例祭は極めて簡素に行われ、大げさな余興は一切なし。市内は喪章を附した国旗と献燈を掲げる

昭和 5 (1930) 年

- ①祭典の特徴：◆鎮座30周年の祭典であり、盛り沢山な催し物が執り行われた ◆この年より、剣潭白虎隊や剣舞が披露されており、一方で青年ダンスが登場している。世界不況を反映したものか ◆音楽会がこの年から始まった ◆催し物がラジオで全島に中継 ◆音楽会での曲目も時代を反映したものとなる
- ②市内の装飾：各戸、軒には国旗、各町内には交叉された大国旗や幟が立てられた。また、献燈や電装飾の飾り付けも行われた
- ③余興（新公園）：◆台北音楽会：行進曲「軍隊」、圓舞曲「東洋の薔薇」、瑞唄「春雨調和樂」、意想曲「狩獵」、童謡唄歌集「銀の星」、ブームス「ハンガリアンダンス No.5」、歌劇「天国と地獄の序曲」と行進曲「太湖船」
- ④各町内の催し物
- 10月27日昼：◆京和会：空地に祭壇を設け、神輿獅子・鎧等を並べ、台湾神社に模った屋台を曳き出す。また、300名の児童による子供神輿 ◆元園町会：奉祝山車および奉祝手踊り ◆台北検番：10月27日、芸妓20名を招集し、台北検番からバスで台湾神社に向かい正式参拝を行う。検番に戻り、囃

し屋台を曳き出し萬華を一廻りしたのち新公園へ乗り込み手踊りを披露 ◆西門町：底抜け屋台に馬鹿囃しで、先頭に子供神輿 ◆大同町：奉祝屋台および奉祝手踊り、神輿の安置と2台の樽神輿を100余名の子供に曳かせて街を練り廻る ◆新起公会：奉祝屋台、奉祝手踊り、青年ダンス

10月28日昼：◆本町会：剣潭白虎隊、娘手踊り、深川踊り ◆京和会：奉祝屋台、剣舞、奉祝手踊り ◆元園町会：奉祝山車、奉祝手踊り

10月28日夜：◆西門聯合会：台湾芝居 ◆台北検番：奉祝手踊り ◆新起公会：奉祝屋台、奉祝手踊り、青年ダンス ◆大同会：奉祝屋台、奉祝手踊り ◆本町会：剣潭白虎隊、娘手踊り、深川踊り ◆神輿渡御：若竹町、八甲町会、西門会、大成会、本町会、大同会、南門外町内聯合、元園町会、府後会、新起公会：子供神輿、樽神輿、神輿 ◆奉納映画大会：府後会青年団により鉄道ホテル横の空地で松竹映画の「山の凱歌」「妖魔綺譚」など数本が上映 ◆奉納生花

昭和9(1934)年

- ①祭典の特徴：◆コロンビア蓄音器会社(=日本コロンビア蓄音器株式会社)のレコードが流され、この伴奏で音頭、手踊りがなされた ◆前年の昭和8年3月、日本政府の国際連盟脱退および昭和8年11月の国民作興10周年の翌年の例祭であったが、まだまだ催し物の自粛ムードはない
- ②余興(新公園)：◆能楽 ◆音頭、手踊り：27日および28日の両日、コロンビア蓄音器会社のレコード伴奏で本町すみれや、市役所有志団、台北南カフェー組合女給有志、コロンビア社員、大稲埕公会有志一同 ◆大稲埕公会および各町内：手踊り ◆コロンビアによる「台湾音頭」、「守れ台湾」、「づんど節」、「おけさくづし」、「昭和盆踊」、「大阪音頭」、「鹿児島小原良節」の指導が市役所で行われる ◆子供・大人相撲 ◆音楽：細田管弦楽団(音楽堂にて) ◆府後会：萬歳(=万才)、手品、手踊り ◆活動写真：「剣士弥源太」6巻、「熊さんの失敗」2巻、漫画1巻 ◆能楽：観世・宝生・喜多各派有志による「羽衣」、「八島」、「松島」、「殺生石」、「船弁慶」、「附子」、「土蜘蛛」 ◆芝居：大稲埕会の喜

劇、府後会青年団の軍事劇

- ③各町内での催し：◆大同会、本町会、大同会、京町会、西門会、新起会、若竹町会、大成会、児玉町会、川端町会：20余組の神輿、子供神輿や樽神輿の練り出し
- ④市内各所での奉納生花：◆池坊台北州聯合橋会、台北州橋会、櫻花遠州流、未生流、龍生流
- ⑤蟹江宋風花瓶陳列
- ⑥市内の飾り付け：◆台北市全市は国旗、献燈を掲げ、各町内には大国旗、大提燈や幟が立て連ねた

昭和10(1935)年

◆始政40年記念台湾博覧会(10月10日開催)のため、新公園内の台湾神社遙拝所は設けられなかった ◆始政40周年を迎え、益々台湾の前途を期待する中で、お祭り景気を盛り上げられた ◆新たに神輿の購入が各町でなされ、市内で賑やかに「ワッシュイワッシュイ」の掛け声が響き渡った ◆参拝者数：45,000名

昭和11(1936)年

- ①祭典の特徴：◆10月27日、圓山公園で行われた招魂祭と宵祭りが重なり、多数の余興で盛り上がる。特に台北南カフェー組合の女給300名による行進は大いに賑わった ◆奉拝式は台北市公会堂(現在の中山堂)横の北白川宮殿下遺蹟記念碑前に設けられた式場で行われた ◆第17代総督小林躋造は、台湾の皇民化・工業化・南進化の方針をたてた。「皇民化運動」を推進した最初の年の祭典であった

②余興

招魂祭余興(圓山公園)：

◆乗馬大会 ◆軍用犬実演 ◆台北検番：10月27日、芸妓20名を招集し、台北検番からバスで台湾神社に向かい正式参拝を行う。検番に戻り、囃し屋台を曳き出し萬華を一廻りしたのち新公園へ乗り込み手踊りを披露 ◆武術大会 ◆相撲 ◆獅子舞 ◆レビュー(大稲埕検番) ◆喜劇 ◆芝居 ◆花火

台湾神社奉祝余興(新公園音楽堂)：

◆演奏(末廣小学校バンド) ◆歌謡曲 ◆漫才 ◆寸劇 ◆奇術 ◆舞踊(若柳吉翠社中) ◆和様合奏 ◆独唱 ◆剣舞 ◆声帯模写 ◆喜劇 ◆映

画（昼：時代劇「旗本六法組」外2篇，夜：時代劇「右門捕物帳」外2篇）◆相撲 ◆演奏（羽衣ダンスホールジャズバンド）◆珍芸 ◆能楽会（観世・宝生・喜多流合同奉納）

公会堂：◆相撲 ◆能楽

③各町内の催し物：◆府後会をはじめ15の町内から神輿の渡御がなされた ◆奉納樽神輿：本島人の大稲埕青年団が大小の樽神輿を奉安し，全市の団体に加わって街頭を練り廻る

④その他：◆台北南カフェー組合では300名の女給が盛装で手に日の丸の小旗をかざして市内行進を行った。27日は圓山公園内の招魂祭で参拝し，翌日は新公園に勢揃いして国旗をふりながら榮町から京町を通り，公会堂前の奉拝所に正式参拝した

⑤市内の飾り付け：◆本島人街である建成町・下奎府町一帯の大通り：御神燈を掲げる

昭和12(1937)年

◆本年，遥拝式は大和町公会堂前の御遺跡記念碑前に設置された遥拝所で挙行される ◆盧溝橋事件に端を発した支那事変（日中戦争）により，10月26日，上海戦で大場鎮が陥落し，翌日には廟行鎮や江湾鎮も陥落したことにより祝賀の提灯行列は行われたが，この年より催し物の華やかさはなくなる

昭和13(1938)年

①祭典の特徴：◆支那事変2年目であり，10月21日，広東の陥落により祭典が盛大に行われることになった。そして，10月27日，武漢三鎮（武昌，漢口，漢陽）が日本軍によって陥落した連絡に，10月28日の祭典は歓喜の坩堝と化した。28日は全島一斉に祝賀の旗行列・提灯行列がなされ，祭典を一層賑やかにした ◆時局に相応しい催し物がなされた ◆遥拝式は大和町公会堂前の御遺跡記念碑前に設置された遥拝所で挙行される

②余興

第一会場（公会堂大集会室）

◆映画（「最後の駐屯兵」，「大名五郎蔵」，「怪童三銃士」）◆演芸会（詩吟，剣技，箏，二重奏，歌謡曲）◆童謡舞踊 ◆国民歌謡 ◆合唱 ◆子供相撲

第二会場（新公園音楽堂，広場）

◆吹奏楽（「台湾行進曲」，「ロマネスカ」，「リジキポルカ」，「獅子の目覚め」，「少年航空兵行進曲」，「愛国行進曲」，「老松」，「伊度の昔囃」，「青葉青葉」，「軽騎兵の序曲」，「台北行進曲」）◆映画（「最後の駐屯兵」）

③市内の催し：少なくとも大同会の神輿は渡御していたが，その他については報道なし

④その他：奉納生花会

昭和14(1939)年

◆新公園に設置されてきた遥拝所はこの年より廃止される ◆時局柄お祭り騒ぎは自粛される

昭和15(1940)年

①祭典の特徴：◆皇紀2600年にあたり，各種奉祝行事が行われた。また，同時に台湾神社鎮座40周年の節目にあたった ◆これまでで最大の32基の神輿が練り出された ◆数多くの神賑行事が神社境内で執り行われた ◆島根神楽が初めて奉納された ◆日本刀の鍛錬火入式が執り行われた

②神賑行事：◆剣舞（第一鳥居内東側舞台）◆舞踊（第一鳥居内東側舞台，嘉調会の乙女26名による奉納舞踊）◆献茶式 ◆全島公小学校児童作品展（休憩所）◆菊花展（拝殿西側）◆生花展（第二鳥居内西側）◆能楽（招魂碑北昇口舞台）◆相撲（元剣譚寺跡）◆映画（能舞台前）◆琵琶（第一鳥居内東側舞台）◆尺八・箏（第一鳥居内東側舞台）◆島根神楽（第一鳥居内西側，演目：「天の岩戸」）

③余興

第一会場（公会堂）

◆ニュース映画 ◆大奇術 ◆歌謡曲 ◆文化映画 ◆珍芸 ◆舞踊

第二会場（新公園）

◆音楽会 ◆映画 ◆漫才 ◆珍芸 ◆舞踊 ◆歌謡曲 ◆奇術 ◆日本刀鍛錬火入式（全島専売三業者主催で鍛錬場において柴田刀匠により日本刀鍛錬火入式が執り行われ，鍛錬された刀は台湾神社に奉納された）

④市内の催し物：◆神輿の渡御：市内全32基に対する神符奉安式が社頭で行われ，各町内に安置された神輿は社頭に渡御集合し，各神輿に神符が奉安され

た。そして、28日任意に市内を練り廻った ◆新富町：子供相撲 ◆有明町：奉納相撲大会（龍山寺）

⑤その他：◆奉納生花：台湾華道会

⑥市内の飾り付け：◆日の丸と十字路には奉祝大提燈が掲げられ、奉祝幟は市内随所に建てられた。また、町々には幔幕が張られた

昭和16(1941)年

◆臨戦下、お祭り騒ぎは止めて厳肅を旨とするとの通達あり。一方、参拝者数は10数万人に上り、式典時の軍官民参列者数は400余名であった ◆神楽「浦安の舞」が初めて神賑行事として舞われた ◆神輿の渡御はなし ◆公会堂および新公園では余興（公会堂：漫才、剣舞、歌謡曲、舞踊劇、合唱 新公園：市民相撲大会、現代舞踊、歌謡曲、日本舞踊、映画）が行われた ◆市内の飾り付け：町の辻々には奉納幟、街角には大提燈を掲げる。軒並みの祝い提燈も掲げられた

昭和17(1942)年

①祭典の特徴：◆大東亜戦争下の初めての神社祭となる ◆神輿の渡御は止めて、各町内に奉安所を設ける ◆奉納催しはお祭り騒ぎをせず、厳肅を旨とする ◆参拝者数：15万人、軍官民参列数400余名

②神賑行事：◆神楽「浦安の舞」：樺山国民学校児童4名（拝殿にて） ◆能楽：台北能楽会（休憩所前の能舞台）

③余興（台北市主催）

第一会場（台北市公会堂）：◆漫談 ◆珍芸 ◆少年剣 ◆日本舞踊 ◆大人剣舞 ◆現代舞踊 ◆手踊り（田植え祭り）

第二会場（新公園）：◆吹奏楽 ◆日本舞踊 ◆歌謡曲 ◆相撲

圓山公園：◆相撲

④その他：◆奉納生花：台北築地町春草会 ◆奉納菊花展：境内

⑤市内の飾り付け：◆街角に大提燈を掲げ、大幟を建てる。軒並みに祝い提燈を掲げる

昭和18(1943)年

①祭典の特徴：◆米英敵性音楽の排除により、純日本式の音楽のみとなる ◆神輿の渡御は行わず、奉安

所に安置しただけ

②神賑行事：◆奉納舞楽：「浦安の舞」（建成国民学校の児童4名） ◆能楽

③余興

第一会場（台北市公会堂）

◆漫才 ◆剣舞 ◆軍国歌謡 ◆三曲合奏 ◆手品 ◆日本舞踊 ◆吹奏楽

第二会場（台北新公園）

◆吹奏楽 ◆手品 ◆漫才 ◆剣舞 ◆軍国歌謡 ◆映画

圓山公園：奉納相撲

④市内の飾り付け：◆日の丸の旗、祝い提燈、奉納幟と幔幕で飾られる

⑤その他：◆新台湾音楽第一楽団研究会：奉納音楽会（萬華龍山寺、大稻埕媽祖廟の2箇所） ◆台北北料理飲食店組合および大稻埕方面青年団：奉納余興（日新町媽祖廟前にて） ◆奉納菊花大会

終わりに

昭和18年3月に台湾総督府文教局社会課より発行された「台湾に於ける神社及宗教」には、遥拝所を含むと201箇所の神社が掲載されている。この内、25%にあたる50箇所の神社の例祭が10月28日である。従って、当日の台湾は、台北市だけがお祭りであつたわけではなく、主だった市街でもお祭りであつたため、あたかも台湾中のあちこちが催し物で賑やかであつたに違いない。手に趣向を凝らした飾り物や、遠く離れた故郷の踊りがあり、内地より取り寄せた神輿による練り廻り、また、あちこちの土俵で相撲がとられた。年に一度の憩いの日であつた。

台湾神社の場合、表祭りと陰祭りが隔年に執り行われた。大正6年頃までは、表祭りと陰祭りの区別が明確にされていたが、その後は、明石元二郎の死去（大正8年）、大正天皇の病気の悪化（大正10年）、関東大震災（大正12年）、鎮座25年記念（大正14年）、大正天皇の御諒闇・鎮座30年記念（昭和2年）などにより表と陰祭りの区別が無くなってしまったようである。昭和天皇の御大典（昭和3年11月）以降は、鎮座30周年（昭和5年）、国民精神作興10周年（昭

和8年),そして昭和11年から始まった皇民化運動,昭和12年に勃発した支那事変,そして大東亜戦争下での催し物は市民に希望,勇気,団結力を与える催し物内容のものであった。

明治40年,遙拝所が新公園内に設けられ,催し物開催場所も当初の圓山公園から新公園に移された。催し物は城内の街町だけのものではなく,大稻埕や艋舺(後の萬華)に住む本島人による蜈蚣閣や詩意閣などの山車や屋台風のものも祭典を賑わしたが,大正の終わり頃からは全て純日本式に統一されていた。神輿はそれらに替わるものであった。昭和12年には,本島人の大稻埕青年団が神輿の購入を行い,市内を練り廻っている。そして,昭和15年には,32基の神輿が練り出された。また,華やかに着飾った各検番の芸妓の手古舞姿や手踊りは台北市民のみならず,余興を見るために各地から台北に集まった人々を大いに虜にしたに違いない。

注

- (1) 台湾には福建南部から移住した開拓民が多数存在した。これらの移民は媽祖を祀って航海中の安全を祈り,無事に台湾島へ到着した事を感謝し台湾島内に媽祖の廟祠を建てた。このため台湾では媽祖が広く信奉され,もっとも台湾で親しまれている神である
- (2) 官幣社は神祇官(律令制で朝廷の祭祀を司る。明治維新政府の官庁であり,神祇・祭祀を司る)が祀る神社,国幣社は地方官が祀る神社とされた。官幣社・国幣社という名称や,上記の分類は,律令制の社格に倣ったものである。主として官幣社は天皇・皇族を祀る神社など朝廷にゆかりのある神社を中心に列格され,例祭・祈年祭・新嘗祭に国から奉幣(天皇の命により幣帛を奉獻すること)を受ける神社である
- (3) 神社の恒例祭の時に,神殿において神職の執行する厳粛な祭典が終わった後,神楽や獅子舞い,舞楽,奉納武道,奉納相撲,競射,神輿,山車,仮装行列などさまざまな催しをするが,これらを総称して神賑行事という
- (4) 弘化4年(1847年)に伏見宮邦家親王の第9皇子として生をうけ,一時,僧門に入るが,明治3年に還俗して,伏見宮に復帰,軍籍に身を置くようになった。プロシアにも留学し,兵学を学び,明治5年に北白川宮を相続し陸軍の近代化に尽くす人材となった。明治28年4月17日に下関条約が締結されたことにより,近衛師団の団長としては台湾平定のため5月31日,台湾北部の澳底湾に上陸した。しかし,台湾には抵抗勢力があり,また,湿気をもった暑さと非衛生的な環境でもあっ

た。戦いは過酷を極め,台湾中部でゲリラに苦戦を強いられ,明治28年10月28日,台南でマラリアのため49歳で病死したと言われているが,暗殺説もある。死後は「台湾平定の神」として台湾神社をはじめ台湾全土の数多くの神社に祀られた。北白川宮能久親王を祀る神社の数多くの例祭日は,北白川宮能久親王が薨去した10月28日である

- (5) 台北城内は清代に大稻埕(現在の大同区付近)と艋舺(後の萬華)の間に築城された面積約1.4平方キロメートルの城郭であり,ちょうど,大稻埕と艋舺に挟まれた台北府の所在地であったことから台北府城とも称された。現在の中正区である。この城内の外が城外と呼ばれ,大稻埕や艋舺を指した
- (6) 廈門の商人で,やがて台湾の大稻埕に移り住み,茶葉の交易で富を築いた人物で,「台湾茶葉の父」と呼ばれ日本統治時代の台湾における実業家
- (7) 政治家。台湾彰化県鹿港の出身。日本の台湾統治に積極的に与した台湾島人有力者。いわゆる「御用紳士」として評されることが多い
- (8) 日本統治時代に台湾に住んでいた人達を言う。一般には漢人と言うが間違いで,相当数は漢人が住む以前に住んでいた原住民との混血となっていた。但し,原住民に対しては「蕃人」と差別して呼んでいた。本島人に対して,内地人とは日本から渡台した日本人を言う
- (9) 天皇など国の元首がだす使者のこと
- (10) 平安時代以降の天皇,皇太子,親王,および公家の平常服。外見上は衣冠とほとんど同じであるが,「直の衣」の意味より平常服とされ,色目・紋様も自由であった
- (11) 宮地巖夫。明治~大正時代の国学者。宮内省式部掌典として明治天皇の側近を務められた明治における神道界の重鎮。掌典職は,日本の皇室において宮祭祀を担当する部門で,宮中三殿においてその職務を行う
- (12) 神職の職称(職名)の一つである。今日では,一般神社では宮司の下位,権禰宜の上位に置かれ,宮司を補佐する者の職称となっている
- (13) 白衣の狩衣を着たもの。諸宮司・神社などの雑役や,貴族などの従者で傘持ち・沓持ち・馬丁などをする者
- (14) 儀礼・護衛のために,天皇・皇族・高官や外国の賓客などにつけられる兵
- (15) 日本に於ける勲章の1つ。明治21年(1888年)1月4日に勲一等から勲五等までを制定,後の明治29年4月13日に勲六等から勲八等までが追加制定された。女性のみ授与される勲章で,デザインは,古代の女帝の冠を模した宝冠を中心に周囲には真珠と竹枝,桜の花葉を配している
- (16) 勲章・褒章・記章などを身につけるために用いる紐。大綬・中綬・小綬・略綬の4種がある
- (17) 芸者と出先(待合・料理屋など)との連絡事務所。

- 見番とも書く。吉原で女芸者の風俗取締りのために安永年間(1772~81年)に創設された見番所を起源とする。東京は一花街に一検番であるが、大阪は一花街に多くの扱店(検番に同じ)があるなど、機能や組織には地方差がある。主要な業務は、芸者の開廃業の手続きや伎芸試験にあたるとともに、芸者の毎日の営業を仲介することで、事務所内に管轄の全芸者の名札を掛け並べて就業状況を一覧できるようにしてある。出先と芸者屋(芸妓置屋)との勘定差引も検番の仕事で、この勘定の手数料と組合費で運営される。検番所属の箱屋がいる場合は芸者の送迎を勤める
- (18) 江戸時代の祭礼で、男鬘をした男装の女性が山車や神輿の先駆をした芸妓
- (19) 水干は狩衣の一種で、水張りして干した衣晒した麻布で仕立てた。本来下級官人の服装であるらしいが、庶民はこれを晴れ着とした
- (20) 平安時代以降、貴族などに使われ雑役に従事した者。下僕
- (21) 本祭り(表祭り)が隔年に行われる場合、その例祭のない年に行われる簡略な祭り
- (22) 近代の教育において、児島高德は代表的忠臣として持て囃された。歴史や修身の教科書に登場するだけでなく、音楽においても「児島高德」という文部省唱歌が採用された
- (23) 神道の祭祀で用いられる幣帛(神殿に供える物の総称)の一種で、2本の紙垂を竹または木の幣串に挟んだものである。幣束、幣ともいう。通常、紙垂は白い紙で作るが、御幣にとりつける紙垂は白だけでなく5色の紙や、金箔・銀箔が用いられることもある
- (24) 金色の紙垂が付いた幣束
- (25) 香炉をのせる机
- (26) 香を焚くこと
- (27) 山岳の未開拓の地に居住する原住民を意味する。昭和11年に高砂族に改称された
- (28) 神事場で祭壇の左右に立てる祭具。緑・黄・赤・白・青の五色絹の幟の先端に紳を立て、三種の神器を掛けたもの。向かって左側に剣を掛けたもの、右側に鏡と勾玉を掛けたものを立てる
- (29) 愛知県名古屋市長区の有松・鳴海地域を中心に生産される絞り染めの名称。江戸時代以降日本国内における絞り製品の大半を生産しており、国の伝統工芸品にも指定されている。「有松絞り」、「鳴海絞り」と個別に呼ばれる場合もある
- (30) 祭礼に奉納される山車のこと
- (31) 神社の例祭において神(一般には御神体を乗せた神輿)が巡幸の途中で休憩または宿泊する場所、或いは神幸の目的地をさす。巡幸の道中に複数箇所設けられることもある
- (32) 御霊代を納めた櫃
- (33) 宴席やお座敷などの酒席において主や客の機嫌をとり、自ら芸を見せ、さらに芸者・舞妓を助けて場を盛り上げる職業。歴史的には男性の職業
- (34) 一枚の板に一般には化粧の施した二人の少女を乗せて4人の労力(一般的には、各家などで雇う本島人の労働者)が担ぐもの
- (35) 慶応元年9月22日生まれ。伏見宮邦家親王の第16王子。明治5年、閑院宮家6代を継ぎ、明治11年親王となる。フランス留学後、騎兵第二旅団長、第一師団長、近衛師団長などをつとめる。大正元年陸軍大将、8年元帥。昭和6年参謀総長。昭和20年5月20日死去。北白川宮能久親王の弟親王にあたる
- (36) 女子に対して裁縫・手芸を授けた教育機関のこと。芸妓・娼妓に必要な最低限の教育を与えることを目的として、大正11年3月26日に竣工した。内地では、読み書き算盤も教えたようである
- (37) 龍舞は龍踊りとも言い、巨大な龍を複数の人間が棒で支え、龍が玉を追うように踊り舞わせる
- (38) 著名な古詩などの伝説の人物を乗せるもので、一間足らずの台に少女2人ずつ載せて8人で担ぐものである
- (39) 盆上に雅致のある自然石を立て小石等を配して山水その他の風物を描写するもの。室町時代から置物として観賞されてきた。石州流、細川流、遠州流等の流派があり、それを作る(打つ)場合の態度、手順などの作法が定められている
- (40) 天皇が、その父母の死にあたり喪に服する期間。また、天皇・太皇太后・皇太后の死にあたり喪に服する期間
- (41) 式場や昔の軍陣などで、周囲に張り巡らす、横に長い幕
- (42) 主人の供で郭へ通う奴を舞踊化したもの
- (43) 豆粒のような小さい丸を染め出した布。本来は絞り染めをいう。木綿布を藍で染めたものが代表的
- (44) 即位の礼は、天皇が踐祚後、皇位を継承したことを内外に示す儀典で、最高の皇室儀礼とされる。諸外国における戴冠式にあたる。即位式の後に、五穀豊穰を感謝し、その継続を祈る一代一度の大嘗祭が行われる。即位の礼・大嘗祭と一連の儀式を合わせ御大礼または御大典とも称される
- (45) 日本舞踊で、伴奏音楽を演奏する人々。唄・浄瑠璃・三味線・囃子などの演奏者をまとめていう
- (46) まだ水揚げの済まない見習い女郎のこと
- (47) 明治28年、北白川宮能久親王の薨去により北白川宮を相続。明治42年に明治天皇の第7皇女・周宮房子内親王と結婚した
- (48) 皇族で久邇宮朝彦親王の第三王子。香淳皇后(昭和天皇の皇后)の父。陸軍軍人
- (49) 俗謡、俗曲にあわせておどる滑稽な踊りで漢字表記は「活惚れ」。江戸時代、住吉大社の住吉踊りから変じたものであるとされる
- (50) 昭和15年11月10日に開かれた「皇紀二千六百年

奉祝会」に合わせ、全国の神社で奉祝臨時祭を行うに当たり、祭典中に奉奏する神楽舞を新たに作ることが立案され、当時の宮内省楽部が国神社に伝わる神楽舞を下地に作曲作舞した神楽舞である

- (51) 大東亜戦争は太平洋戦争と同義であると認識されることも多い。昭和16年12月8日のマレー作戦および真珠湾攻撃後、同12月12日の東條内閣での閣議決定により、「大東亜戦争」の名称と定義が定められた

参考文献

- 台湾日日新報：明治34年～昭和18年（国立国会図書館所蔵マイクロフィルム）
台湾神社誌：台湾神社社務所編纂（昭和7年7月31日7版）